

スタートレックの新たな研究フェーズへの期待

高橋 正 *

甲南大学 知能情報学部

私は、1960年代のSFテレビドラマシリーズが好きでした(今でも好きです)。それらのなかでも「スタートレック(宇宙大作戦)」が特に好きでした。そこで登場する機器は現在の「ガジェット」タイプの機器であり、稚拙なストーリーであることは子供ながらも理解ができたのですが、夢を感じるテレビドラマでした。

ある方は、「研究会は皆様と実際にあって話をする(内容は学問とは関係なくとも)ことが一番重要なことです。」と書いていたが、そのことを実感しています。上述のSFテレビドラマで言えば、科学が進歩し機器が発展した時代に何故宇宙に行くことを描いたのかです。冒頭に、「宇宙、それは人類に残された最後の開拓地である。・・・これは人類初の試みとして、5年間の調査旅行に飛び立った・・・驚異にみちた物語である」というオープニングで始まっていました。このことは研究会での発表に関して言えば、行って話をするはその過程とのセットで内容が深まるのではないかと考えています。現地まで行く過程で考えること、現地で会って感じること(挫折も含め)、帰りに振り返る時間(自信もしくは反省)、これらが融合して次のモチベーションに繋がって行くと思います。とはいえ、このことは無駄が多いと指摘されることは確かですし、それは正しい指摘です(適度なバランスが必要です)。

英語のことわざ「a rolling stone gathers no moss」の意味としては、英国式の「世の中に合わせ行動を軽々しく変える人は結局成功しない。」とするものと、米国式の「世の中に合わせて、柔軟に行動が変わることにより、失敗を避けることができる。」の相反する2通りの解釈があります。この解釈が2通りあるように、研究の発展にも、2通りの発展があると思っています。私は、数式処理の研究は後者のように感じています(それは私だけの感覚かもしれませんが)。

私は、数式処理の研究は世代交代とともに新たなフェーズが必要だと思っています。その新たなフェーズは若い世代が作るものです。私は、1960年代のSFテレビドラマシリーズのような、数式処理の新たな研究フェーズを期待しています。

*takahasi@konan-u.ac.jp